解説

山本薫

アシュラフ・ファイヤード（Ashraf Fayadh）は一九八〇年、パレスチナ難民二世としてサウジアラビアで生まれた。ガザ地区のアズハル大学で学び、詩人、アーティスト、また現代美術のキュレーターとして活躍していたが、二〇一三年にサウジアラビアの勧善懲悪委員会（いわゆる宗教警察）に告発され、逮捕された。いったん保釈されたものの二〇一四年に再逮捕され、禁固四年と鞭打ち八〇〇回を宣告された。上告したところ、むしろ量刑が重くなる結果となり、二〇一五年に背教の罪で死刑宣告を受けた。

裁判では神や預言者、サウジアラビア国王などを冒涜するのを聞いたといった証言に加え、二〇〇八年に発表した第一詩集『内部の指示（*al-ta'īmāt bil-dāḫil*）』が背教の証拠として法廷に提出されたことから、人権団体のみならず、世界各地の作家や国際ペンクラブによる抗議の声が高まった。そうした抗議を受けてサウジアラビア当局は禁固八年、鞭打ち八〇〇回に減刑したものの、ファイヤードはいまだ獄中に囚われている。

『内部の指示』は二〇〇八年にレバノンのファーラービー社から刊行されたが、今回は二〇一六年にアメリカのオペレーティング・システム社が英訳とアラビア語原文を併記する形で出版した版を底本とし、英訳も参考にしながらアラビア語原典から日本語に翻訳した。この版はファイヤードの釈放を求める運動の一環として作成されたもので、彼を支援する世界各地の作家たちのメッセージも掲載されている。その中にはたとえば、モロッコで反体制派として一九七〇年代に八年間投獄され、その後フランスに亡命した詩人のアブドゥッラティーフ・ラアビーの名も見受けられる。

政権に批判的な言論人が逮捕、投獄される事態はアラブ諸国でこれまでにも繰り返されてきた。近年では歌手やブロガーなど、若い世代に影響力を持つ人たちへの政治的圧力も目につく。一方で、一九九〇年代にエジプトでリベラルなコーラン研究を提唱したナスル・アブーザイドが背教者と告発された例に代表されるような宗教保守勢力からの告発や、大衆の宗教感情を政治利用するために不道徳と見なされる行為を政権が取り締まる例も後を絶たない。最近、TikTok でダンス姿を配信した若い女性たちがエジプトで相次いで逮捕されたのはその一例である。

ワッハーブ主義の厳格な適用を統治の正統性の基礎とするサウジアラビアでは、宗教に関する自由な言論は体制批判に直結しうる。だとしても、いったいどんな詩を書けば死刑を宣告されるのだろう。当初はこんな好奇心から彼の作品を読みはじめたのだが、実際に読んでみれば「背教」などという恐ろしげな言葉から連想されるような作風からはほど遠い、飄々としたシニカルな感覚に、アラブ現代詩のあらたな可能性を感じ、大いに魅了された。確かに神やイスラームの信仰への皮肉な言及が随所に散りばめられてはいるが、神の存在を否定しているというよりも、神を中心に戴く社会に居場所を見いだせない、遺棄された子どものような疎外感や虚無感が感じられる。そうした感覚の根っこには、世俗主義のリベラルなアーティストとしてサウジアラビアで暮らすことの息苦しさと並んで、パレスチナ難民という出自があることは、彼の詩を読めば明らかである。そこで今回は、第一詩集『内部の指示』の中から、難民としてワタン（故国）への思いをうたった詩を二編選ぶこととした。

アシュラフ・ファイヤードは二〇一九年

に、獄中から第二詩集『病的な伝記（*sīra maraḍiya*）』を発表している。刊行後には同じく獄中からモロッコのウェブ新聞とのインタビューに応じ、獄中経験から人間的にも知的にも学ぶことが多いと前向きに語る一方で、故国パレスチナについては「知識人や政治家や民衆の多くに見捨てられたが、それでもパレスチナの大地や空気、そして地中海を懐かしまずにはいられない」と複雑な心境を吐露している（※）。

※　Hespress, 2019/5/19　https://www.hespress.com/ art-et-culture/432250.html